

鬼殺隊、 蠟丸の仕置き

く
体
験
版
く

そこにいたのは、黒い隊服に半半纏の羽織を纏った端正な顔立ちの青年だった。

「富岡さん……」

いつも無表情の富岡義勇だが、今の富岡はいつもにも増して陰鬱で、気安い声など掛けられない雰囲気を持っている。

「御館様の御前にて無礼を働き、柱である不死川に対する暴行が審議された」

「……」

糸使いの鬼との決闘の直後、突然連れ出された「柱」と呼ばれる強豪ぞろいに、最上の位につく「お館様」。鬼になった禰豆子の処置を決定する場で、妹を刀で何も刺し、激高した炭治郎は、拘束されながらも動き、白い髪の毛に強烈な頭突きを食った。

しかし、それは大事な妹を傷つけた相手が悪い。炭治郎は、その仕打ちに報いたただけだ。あの場にいた全員が、それは納得するだろうと思う。しかし……

御前から炭治郎を連れ出した隠たちは、半泣きになりながら

「柱、怖いんだよ！」

と叫んでいた。白い髪的男への怒りと、突然の御前会議の混乱に、何も考えられなくなっていた炭治郎には、どうでもよいことだったが、今更になって妖者たちの言葉がよみがえる。

背中に冷たい汗が流れるのを感じながら、炭治郎は生唾を飲み込みながら、富岡の言葉の続きを聞く。

「沙汰は、蠟丸の仕置き。夜が明けるまで、耐えろ……」

そう言い残し、富岡は踵を返して暗闇へ消えて行ってしまった。

（蠟丸？一体なんだ？）

言葉の意味がわからない炭治郎には、これから自分に行われる仕打ちがわからず当惑した。ただの痛みを主軸にした刑罰ならば身に受けるのは堪えられるが、富岡の陰鬱な声と、異様な意味を含んでいるかのような言葉に、炭治郎は不安を募らせる。

しかし、急にこれまで感じていた甘い香りが強くなり、同時に炭治郎が忌む特有の嫌な香りが鼻孔に入り込んできた。

それと同時に、鏡の隙間から数人が現れ、全員が顔に黒御簾を被り、服装はまばらだったが、人間ならざる気配に鬼か、と一瞬炭治郎は戦慄したが、鬼殺隊の懲罰というならば、鬼を生かしてはいまいと思いき、腹を据える。現れた妖者が炭治郎の危惧も慮らず、仰臥する身体に覆いかぶさってくる。

「柱に齒向かったんだって？命知らずな小僧だね……」

「これは可愛い……こんな純粹そうな子供にこの沙汰を下すなんて、柱もお館様もひどいもんだ」

「最後まで気を狂わせないでくれよ……？」

妖者たちが口々に紡ぐ言葉に不穏な響きを感じ、ますます怖気を感じながら、炭治郎は齒を食いしぼって力が抜けそうな不安に耐える。

ただでさえ四肢の力が自由にならない炭治郎の手足の上に体重を乗せ、妖者たちはさらに拘束を強めると、炭治郎の着衣に手をかけた。

「何をするんだ！」

腰のベルトを引き抜き、隊服のボタンをはずしてゆく妖者たちの動きに、炭治郎は非常な焦りを感じながら必死に抵抗しようともがくものの、妖者たちの拘束はびくりともしない。妖者たちは手慣れた物らしく、無駄のない動きで炭治郎から衣服を脱がせ、下帯も取り、たちまち全裸にしてしまう。

「……………」

身体に無数の傷跡を負いながら、無駄のない引き締まった筋肉の上に、若々しい瑞肌が覆いかぶさっている。日の光に晒されない部分は案外白く、それは美しかったが、妙に艶めかしくもあった。

「綺麗な肌だね……これは遊び甲斐がある……」

そう言って妖者の一人が、炭治郎の下腹に掌を這わせ、肌の感触を愉しむように、ゆつくりと円を描いて撫で回す。

ゾクゾクと怖気と嫌悪が炭治郎にわきあがり、とっさに手を振り払おうとするものの、妖者たちに拘束された腕は全く動かなかった。

「裸じゃ寒いだろうから、これは着せてあげるよ……」

一瞬、炭治郎の上体の拘束が解かれ、黒と緑の市松文様の羽織を着させられたが、炭治郎が反撃に打って出るより早く、再び妖者たちに拘束されてしまった。

おそらく眠っていた時から嗅がされていた香の作用で、動きを八分は鈍らせていた。周囲で唾液を捏ねる音がピチャピチャと響き、どんどん自分に狭まってくる圧迫感に、炭治郎は押しつぶされそうになり、カチカチと鳴りそうな奥歯を噛み締め、気丈を装う。

「っ！何をするんだ！」

不意に両足の親指に灼熱を感じ、弾かれたようにそこへ目線を送ると、足裏に座していた妖者が、炭治郎の足の親指の先に布団針を刺している。

針は深々と刺さっていたが、痛みは一切無い。その代わりに、足先からどんどん熱がわきあがり、下半身から上半身を侵食するように、熱が炭治郎を包み込んできた。

「うあっ……！はあ、はあ、はあ……っ」

身体中が茹でられたかのように熱くなり、髪の手まで伝わって、端正な顔を朱くのぼせ上げて頬を赤らめ、瞳を涙で潤ませる。

はあはあと荒い息を繰り返す炭治郎を見て、妖者たちは気持ちの悪さを増した声でその様子を褒めそやす。

「早速効いてきたね・・・！身体が熱いかい？」

「まだまだ熱くなるぞ？我らに乞うようになるほどな・・・ククク」

「ほら、こっちも反応してきた・・・」

妖者の一人が、左右に広げられた、炭治郎の足の付け根にある雛先を指で弾き、一瞬何をされたのかわからなかったが、すぐに理解した直後、屈辱で炭治郎はさらに顔を赤らめた。

「やめろっ！さわるな！」

激しい声をあげようと試みるが、熱に浮かされた身体では芯の通った声など出るはずがない。

「ああっ・・・！」

炭治郎が気づくより早く、顎を取られて途端に口吸いを施され、同時に口内へ甘ったるい粘液を流し込まれる。君が悪くてすぐに吐き出したかったが、炭治郎が飲み込むまで口は離されることなく、幼い唇を覆ったままだった。

「くはっ！はあ、はあ、はあ、はあっ……！」

ようやく息を解放されたが、炭治郎の身体はますます熱くなっていた。

（なんだこれは！身体が勝手に熱くて……頭がすっかり意識を保てない……！）

困惑する炭治郎をよそ眼に、妖者の一人がその若々しい肌の上をなぞった時、衝撃と言える感覚が走って、思わず炭治郎は声をあげていた。

「ああああっ！」

自分でも驚いた自らの反応に、取り返しのつかないことをしてしまった後の切迫感を感じ、炭治郎はすぐに口を噤んだ。

しかし、周囲の妖者たちにはその反応だけで充分だったらしく、厭らしい笑い声は深く囁かれる。

「効いてる効いてる……」

「この子は感じやすいね？経験があるのかな？」

「純朴そうな顔をして、いけない子だねえ……」

すると、周囲の唾の音がさらに高まり、灯が消えるように音が静まったかと思うと、数本の手が炭治郎の健康的な素肌に乗せられ、無遠慮に撫でまわし始めたが、その掌には粘質な液体が塗されていて、ぬるぬるとした感触で肌の神経を刺激し、炭治郎は我慢することができず、身体をくねらせて熱い息を吐きながら艶めいた声を上げた。

「うっ……ああ、はあ、あっ……くっ……う、うんっ！んっ、あ、やめ、あ、ああ……っ」

※

「本当に食欲な小僧・・・安心しろ、まだまだ始まったばかりだ」

自分の意思とは真逆の言葉を好き勝手に投げかけられ、その全てに反論したかったが、下半身が愉悦で熱すぎて、口を開けば情けない声ばかり出てしまう。

二本の舌の動きはどんどん素早く巧みに動き、根元をぐるりと舐めまわしたり、先端のくびれを突いたり、変則的な動きで炭治郎を容赦なく追い詰めてゆく。

(ううっ！ま、また来る、あああっ！)

快楽に耐えられなくなった炭治郎の身体が大きくのけ反るが、腰には枕を噛まされているため、突き出すような姿勢からは逃れられなかった。

「うあっ、あっ！ああっ！あっ！ああああっ！んんんっ！ふあっ！あっ！だ、だめ、だめだっ！」

炭治郎は唯一自由に動かせる首を左右に激しく振りたくり、赤銅色の瞳に溜まった涙を空に散らしながら限界を叫ぶ。

色好みな鳴き声を上げられ、妖者たちも感に入ったのか、炭治郎の雛先を騷る舌の動きは一気に激しくなる。

「ほらほら、こうされるとたまらんようだな……」

「極めるときは「出る」と言うのだぞ……わかったな……」

妖者たちの舌の動きが速まり、雛先を舐る淫音を空間に響かせ、炭治郎の切なげな吐息が空気の熱を上げる。一本の舌が、硬くなった先端で鈴口を素早く舐った直後、少年の柳腰に力が入り、炭治郎は頭が真っ白になる射精絶頂を一気に迎えていた。

「ああああああああつっ！」

雛先の先端から勢いよく白液が放たれ、それは炭治郎の胸元までに届いた。

電撃を浴びたような激烈な快感に、炭治郎は意識を全て持っていかれ、しばらくは何も考えられず、身体之力も抜けて、顔を朱に染めながら荒い息を吐き、快楽を極めた余韻に浸る。

「ぬう・・・極めるときは「出る」と言えと教えたばかりだというのに・・・」

不満そうな妖者の声を耳にし、炭治郎は弛緩していた心に怖気を感じ、不気味な妖者に対して改めて寒気を覚えた。

「やり直しじゃ、やり直し」

そうだ、そうだな、と妖者たちが賛同の声を上げ、炭治郎に迫る輪を狭めてゆく。

「あつ・・・あつああ・・・」

とんでもないことをしでかしてしまった後のように、叱られる幼子のような心境で、炭治郎は広げられた下半身を見る。

激しい吐精をしたばかりでひどく鋭敏になっている雛先を、再び妖者たちの舌が包み込むのを目撃し、炭治郎は絶望する。

心は萎えているのにいつまでも反応したままになっている半身を奇妙に思いながら、再度感じる表面の快感に、意識が流されてしまう。

「んうううっ！んあああっ！」

ひとつ前よりも一層敏感になっているであろう雛先を、容赦ない舌責めに晒し、さらに手指まで加わって炭治郎の性感を追い詰めてゆく。

「はああ・・・っ・・・あっ・・・ああ・・・っ」

炭治郎の全身が小刻みに震え、責められるがままに、声と肌は鳴き続けた。

「あああああつ！あつ！うう——っ！」

雛先の先端から、今度は天井の鏡に届くのではないかと思われるほどの激烈な勢いの精が吐き出される。これほど激しい射精には相当の快楽が伴い、達精の緊張を終えて炭治郎はぐたりと無防備に身体を弛緩させる。その肌の上に点々と自らの精が降り注ぐが、そんなことには構っていらぬほど、先の絶頂は激しかった。

「ああつ・・・はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

赤い舌を突き出し、荒い吐息を繰り返す炭治郎の身体は、何度吐精を強要されたのか、桶をかぶったかのように白液が付着し、残酷に思えるほどの被虐感に満ちていた。

もう何度強制的に絶頂をさせられたかわからない。数を追って数えても五指にあまるところで、もう覚えてなどいなかった。

しかし一方的に責められているようで、炭治郎には矜持が残り、そのひと息を倒せず妖者たちは不機嫌に焦れていた。

「こやつ・・・いつまでたつても言わぬな・・・」

「全く、極める際は「出る」と言え、と何度も強いておるのに・・・」

炭治郎の胴の上に妖者の一人が腰かけ、足とは逆の方向から、強かに吐精したばかりの雛先を蹴る。

「あああああつ！あつ！あああああつ！」

胴の上に乗った妖者を跳ね飛ばさん勢いで背を反らせ、炭治郎は連続して精を吐き出した。

ぐちゅぐちゅと淫らな水音が空間に響き、弄ばれる雛先は妖者たちに擦られ扱かれ捏ね回され、手と舌、口の刺激を持って幾度となく果てさせられた。

しかし炭治郎は、妖者たちの命令には頑として従わなかった。つまり、「出る」である。

(言うもんか、絶対に言うもんか・・・！)

「これ」と決めれば、炭治郎の精神力は驚嘆するほどに強い。それが自分の身を追い詰める展開になろうとも貫き通す。それが妖者たちの自由にされる屈辱の責めに対抗する、唯一自分を保てる手段でもあった。

「こんなに強情な小僧は初めてだな……ではあれをやるか……」

一人がそういうと、妖者たちの間でさざ波のような笑い声が起こった。不穏としか言えない雰囲気を感じた。彼らの動きに、吐精の連続で疲弊しきった炭治郎にも感じられるほど、それは陰険なものだった。

「小僧、天井にある自分の姿を見てみよ」

見るべきではない、と、とつきによぎったものの、炭治郎は鏡に映った、自らの精液で汚れた裸体に目を向けてしまう。

左右に広げられた両足の間に灯籠が置かれ、様子がよく見えるようにされたのも陰湿だったが、股の下で煌めく二本の針を見て炭治郎は戦慄した。

「なっ……！何を、する気だっ……！」

「クククク、今度こそ、これで素直になるだろうよ」

そう言うと二本の針を持った妖者が、容赦なく雛先の真下にある陰囊へ先端を突き入れた。

「っ……っ！」

激痛が走る、と覚悟したが、襲ってきたのは抗いがたい吐精感で、気が付いた時には自覚せず意識が白むほどの絶頂を迎えていた。

「あああああああっ！」

再び天井の鏡に付きそうなほどの大噴射が起こり、その凄悦に炭治郎は腰を激しく痙攣させた。しかし下半身の緊張が解けると同時に再び針を突かれ、またもや激しく吐精してしまう。

「うあああああっ！やめっ……！」

しかし妖者は炭治郎の悲鳴など耳に入れず、間を置かずに何度も何度も、針で陰囊を突いた。

「あっ！あっ！あああああっ！あっ！あぐっ……！あああああああ！」

炭治郎の身体から痙攣が止まらなくなり、雛先の先端から立て続けに白液が噴きあがる。一度味わっただけで意識を落しそうになるほどの快楽を立て続けに味わわれ、耐えきれず、炭治郎の赤みがかった瞳から涙が幾筋も零れ落ちる。

ようやく妖者の動きが止まり、最後に一筋、勢いよく吐き出したのを最後にして責めは終わった。

「はっ・・・はああ・・・っ」

胴にまたがっていた妖者を跳ね飛ばさん勢いで背を反り返らせていたが、悦縛の解放と同時に、どさり、と床に身体を落下させた。

男が一晚で放つ量とはかけ離れた吐精を強要され、体力を使い切った炭治郎の指先が震えている。はっ、はっ、と短い息を繰り返して、胸を上下させる炭治郎に構わず、妖者の一人が問う。

「さあどうだ？これは効いただろう・・・今度こそ、「出る」と言うのだぞ？」

※

大正という時代背景において、時に男であるということには、背徳感を伴う行為への暗黙の了解があり、浮世離れた生活を送っていた炭治郎にもそれは身についていた。

しかし、今炭治郎がされている無体な行為は、これまでの経験など比べ物にならず、男児の尊厳を踏みこじる屈辱極まる行為だった。

最初に富岡が現れたとき、「懲罰だ」と言い残して去ったが、自分は懲罰に値することは何一つしていないと、炭治郎は自信を持って言える。

たとえ上役とはいえ、柱の一人に頭突きを噛まそうが、無礼な態度をとろうが、先にこちらへ無体を働いてきたのは相手の方だ。丹次郎は妹の禰豆子を守っただけである。

(俺は間違っていない・・・！)

だから自分の受ける仕置きは間違っている、と申し立てたいところだが、仕置きは行われ、これまでの責め、炭治郎はせいぜい恥をさらした。

まだ、自分の身体を弄ぶ気か、と妖者たちを睥睨するが、常に甘ったるい香りのする置き布団の上で、炭治郎の意識は風に吹かれる桜の花びらのように揺れ、気を抜くと体の情欲に全てを預けてしまいそうだった。

「しかし張型を引き抜かれた姿は色っぽかったな。気に入ったなら、また後程ゆっくり味わわせてくれよう」

(二度と御免だ・・・！)

排出の快感を何倍にも凝縮した苛烈な感覚に炭治郎は怖気を覚え、ちらと妖者が未だ握っている淫棒見ると、あれが体内に入っていたのかと思うと寒気が走る。

しかし炭治郎が体の異変に感じたのに刻はかからなかった。最初に鼻孔を支配していた甘い匂いがさらに強くなり、頭がさらに妄つとして、目の前の景色が二重になったり正されたりを繰り返す。

(また、眠っている間に何かをされた・・・！)

気を失ってしまった自分を不甲斐ない、と思いつながら、身体の、特に下半身の奥から湧き上がってる疼熱に、熱い吐息が漏れてしまう。

何もされていないのに棒を飲み込んでいた洞内がズキズキと疼き、思わず秘孔を締め付けると、中が狭ま
ってさらに刺激が強くなった。

「夢見心地であらゆる快樂を見せてやる……お前は可愛い。責め甲斐がある……」

涎でも垂れていそうな妖者の言葉に嫌悪するが、身体の熱は全く収まらない。あれだけ責められて、精も
枯渇したと思うほどに達した炭治郎の半身が、生唾を飲むほどに熱がせり上がってくる。

腰の下へさらに枕のような袋を差し込まれ、さらに尻が高々と上げられて恥ずべき部分が全て曝け出され
てしまう。白い桃尻を驚掴まれ、左右へ強引に開かれると、秘められた秘孔が外気に触れて、体内の熱と
外気の冷たさの落差に息を吞んでしまう。

得体のしれない物を咀嚼し続けていた男が、炭治郎の開かれた両足の間に入り込むと、口からどろりとし
た液体を吐き出した。

その液体の臭いには覚えがあつて、幼いころ屋敷の主人に使われたものだぞと知れた。

そして、次に感じる、息が止まるような感覚に炭治郎はうろたえた。妖者の一人が開かされた炭治郎の秘
孔に指を一本突き挿れたのだが、それだけで腰の奥がカアッと熱くなり、力を失っていた雛先が頭をもた
げてしまう。

「お前はどうかやら初めてではないようだな・・・まあ、これだけ整った容姿だ・・・目を付けられるのが早かったのも、道理だが・・・」

炭治郎の中に挿った一本の指は、何かを探るように、抜き挿しを繰り返して秘孔の入口が泡立つほどに執拗に内臓を責めてくる。

「ああっ！あっ！いやだっ！やめろ！そんなところ、どうかしてる・・・！」

しかし挿入された指が洞内に入って指を曲げられて腹に向かって引っ搔かれた瞬間、熱で蕩けてしまいそのような感覚が炭治郎を襲った。

「うっ・・・！あああああっ！」

射精の感覚とは違う、内にこもる激熱だった。それが細胞にじわじわと染み込み、下半身の震えが止まらない。

(なんだこれ、なんだっ・・・これっ・・・！)

この悦の激しさに危険なものを感じて炭治郎は身体を震わせるが、炭治郎の反応が面白かったのか、妖者たちからはたちまち喜色が上がった。

「ふう、ようやく見つけた。ここがいいのか。抱かれているというのに、身体はあまり開いていないようだな・・・」

それも初々しい、と笑うと、妖者はさらに指を使って炭治郎のひどく弱い部分を何度も指で擦り立てる。一度触れただけでも脳髓が痺れるような快感を受けると言うのに、それを何度も連続して指で擦られ、炭治郎も我慢できるはずがない。

「はぐっ！ああああああっ！ああっ！ああああああっ！や、いやだああああっ！」

激感を感じるたびに身体を激しくくねらせるが、強固に拘束された身体は一向に振りほどける気配がない。この感覚だけを感じ続けてしまったら、頭がおかしくなりそうで、炭治郎はこれを拒絶したかったが、すでに快感を散らすために他へ意識をむけるなどという芸当などできたものではなかった。

「ふふ、熱い熱い・・・こうするとどうだ？さらに良いか？」

感じる部分を今度は爪でカリカリと引つ搔かれ、鋭敏な刺激に愉悦が一段階上がる。

「んああああああああつ！」

叫び声を上げなければ耐えられないほどの激悦に、炭治郎の首が激しくのけ反る。首元に現れた頸動脈の線が艶めかしく、そこから鎖骨に向かって汗が伝う様は、妖者たちの情欲をさらにそそった。

「ほらほらまだだ、まだ良くなるぞ……」

脳髓が蕩けそうな快感を連続して与えられ、すでに快楽に追い詰められている炭治郎には、妖者の声は遠い。ただ、その指がさらに奥を一気に進み、激しく抽挿をし始めたのだ。

「つつつ！あつ！あああつ！あああああああ！」

中を上下に激しく抽挿しながら、挿れるときも出るときも、弱い一点にわざと指を折って圧力がかかるように、厭らしい手管を繰り出してくる。ただ触れられるだけで息が止まるほどの性感帯を、これほど乱暴に暴かれて身悶えずにはいられない。

そして、これよりもどんどん高まってゆく予感がする灼熱の感覚に、炭治郎は驚愕しながら、味わってしまつては危険だと思ひながらも、両足を強引に開かされ、拘束された身体ではどうすることもできない。

(熱い、熱い、なにかが昇ってくる！こんなもの我慢できない！ど、どうして、こいつら俺にこんなことを……！)

そう問えば「懲罰だ」と二の句も無く帰つて来るのは明瞭だったが、こんな陰湿な責めをされるなど、初心な炭治郎には思いつきもしない。

こんな屈辱的な責めを受けるなら、鞭の百叩きの方が何倍もマシだ。

炭治郎の忌々しい記憶と、快樂に弱い若い身体をよつてかかつて翻弄されるなど、これほど屈辱的で残酷な責めはない。

「ふあつ……！やつ……！ああ、あつ！ああつ！あつ……！」

自分でも聞きたくないのに、激しく擦られる中がどんどん熱くなり、炭治郎の喘ぐ声にもこれまでにない、甘い響きが含まれて来る。

これまでただ快樂にされるがまま、大声をだしているだけのようなものだったが、明らかに炭治郎の声色は変わった。

その変化を見逃さず、責める指はさらに抽挿を勢いよくさせ、入口が激しく泡立つほどに激しいものになる。

※

噛みついてやろうかとも脳裏に浮かんだが、挿れられた妖者の肉棒は太く、炭治郎は口の中に頬張るだけが精いっぱい、歯を立てる余裕などなかった。

「ほれほれ動け。全く頑固なヤツだ。しょうがない、そのまま啞えておけ」

すると妖者は炭治郎の後ろ髪を掴むと、そのまま激しく前後に揺らし始めた。

「んぐっ！んんっ！んぐううっ！」

「さすが子供の口は熱くて小さくて別格だな。そのまま舌を絡ませて、先を吸うようにするのだ」

（だ、誰がやるかっ・・・！）

勝手に命じられて炭治郎は反抗心を浮き上がらせたが、下から体内を突き上げられ、生じた圧迫感と最奥を突かれる激感に、声を発しようとする口が止められて、そのかわりに中で舌が暴れた。

「むぐうううつ！んっ！んん——！」

「そうそう、好いぞ・・・そのまま吸い上げるんだ」

炭治郎の舌使いに満足した声を出し、妖者が容赦なく頭を前後に振りたくって、無理矢理口を肉棒で凌辱する。

「剣胼胼ができた硬い掌だ。これで擦られるのがワシは好きでな・・・しかも子供の手は熱い。これは・・・おお、結構な鍛えようだ」

炭治郎の手を掴み、掌を開かせて修行で硬くなった手の皮膚の感触を確かめると、妖者が自分の猛った肉棒にその清廉な手を握らせにかかる。

「こちらも同じように握ってくれ」

手に触れる肉塊が火が付いたように熱く、一瞬怯んで炭治郎は手を引こうとしたが、上から大きな掌を重ねられて上下に激しく擦られる。

「魔羅をうまく舐められないか？手本を見せてやろう。俺と同じ舌使いをするだけだ、簡単だろう？」

大きく広げられた炭治郎の両足の間に顔をうずめ、反応して揺さぶられている雛先を口に咥えると、妖者は想像もつかない舌の動きで表面を滑らせ、腰が蕩けそうな快感を与えてくる。

（か、身体中、どこも熱くて、もうどうなっているのかわからない、何も考えられ・・・）

口も体内も両手も股ぐらも、とにかく熱かった。あれだけ嫌悪していた男の雄だったが、無理矢理頬張らされ、手で擦るように強要され、時間が経つにつれて慣れが生じ、生じる熱に頭の芯がクラクラしてしま

う。
炭治郎と妖者たちの荒い息だけが立ち上り、周囲が淫気に満ち、全員の興奮をどんどん高めてゆく。
無理矢理握らせて擦らせていた妖者が声をあげ、快楽を叫ぶ。

「おおっ！いいぞ！そのまま握れ、もつと強く握れ！」

「しっかり舌を絡ませろ、熱い舌だな・・・」

「いい締め付けだ、食いちぎられそうじゃ、ああ、出すぞ、腹の中にたんと出してやる！」

炭治郎を凌辱する妖者たちが快楽の頂点に到達しようと、炭治郎の身体を使って激しく急き立てる。なにも考えられずただされるがままになってしまっている炭治郎は、身体中のあらゆる部位で弾ける絶頂の愉悅に流され、身体で感じる快感が飽和状態となり、赤銅色の瞳からとめどなく涙を流し続けた。

「んんんんん——っ！」

体内にまた灼けた液体が注がれる感触を受けながら、雛先から白液を吐き出す。

「んんっ！んんっ！んんんんっ！」

激悦を叫びたくても口を塞がれて声が出せず、酸欠状態になりながら達悦が全身を駆け巡るのを感じながら、炭治郎は意識を失いそうになった。

(だ、だめだ、気絶するなっ……！)

氣を失つても当然と言える扱いをされながら、炭治郎の中の反骨心が頭を上げ、なんとか氣を取り戻す。しかし意識があつたところで、次に待ち受けているのは妖者たちの精液の洗礼だった。

「出すぞ、飲み込まねば息がつまるぞ？」

「こちらもお出すぞ、どこにかけて欲しい？」

炭治郎の口と手を使っていた妖者たちが興奮の声を上げ、三人がほとんど間を置かず一斉に精を吐き出す。

「んぐぐぐっ！んぐうううう——！！」

舌を超えた喉の奥に肉棒が突き入れられ、不浄の粘液を無理矢理飲み込まされる。窒息の予感を感じて身体が反射的に精液を嚙下してしまい、炭治郎の臓腑に流れ落ちてゆく。

手を使って達精した二人の妖者は、一方はその赤銅色の髪にかけ、一方は幼さの残る整った顔に勢いよく噴きつけた。

体内から、口から肉棒が引き抜かれ、身体中精液に濡れた炭治郎は力なく敷布団の上へ俯せに倒れた。

身体のあちこちがヒクヒクと痙攣し、髪に掛けられた精液が額から顎を伝い、その感覚に嫌悪を感じる余裕すらない。解放された秘孔からは、流し込まれた白液が幾筋も伝い落ち、凌辱の限りを尽くされた炭治郎は、すでに体中で感じる快樂で虫の息になってしまっている。

小さく短い息をする炭治郎を見下ろし、妖者たちはさらに迫り、その幼さの残る身体に手を伸ばす。

※

極みの途中で身体を放り出され、若い身体が簡単に収まるわけがない。しかし自分で手慰みをすることも憚られ、炭治郎は一人煩悶する。

(だめだ、これぐらい・・・この程度、耐えないと・・・)

富岡に促されて再び散々凌辱されていた敷布団に寝かされる。裏返したらしく、体液にまみれてベトつく不快感はない。いつの間にか四方に設置されていた屈辱の鏡は消え、衝立が立てられて広がった空間に申し訳程度の個室感を出す。

敷布団に仰臥した上から、炭治郎の羽織を掛け、富岡はようやく腰を上げた。

「一刻ほど寝ろ。また迎えに来る」

そう言い置いて背を向け、小屋から出ていこうとする足を、炭治郎は名残惜しそうに眺める。そして、自分ののどから突いて出た声に驚いた。

「待って、ください・・・!」

言つてしまつて思はず自分の口を押えたが、振り返つた富岡に、今更引つ込みがつかない。炭治郎は顔を朱に染めながら首を左右に小さく振り、それでも蚊の鳴くような声で言った。

「待つてください・・・」

その声には閨事を秘めた色香があり、よほど鈍感でなければ気づかない者はいないだろう。炭治郎は正直者だが、自分が長男であるという意識が高いため、他人に世話になるといふ事に後ろめたさを感じてしまふ。

それも、このような始末を兄弟子に頼むなど、羞恥の極みだったが身体の疼熱はこのままでは収まらない。年若く、人並外れた快樂を一方的に与えられ続け、快樂の種火を再びつけられた炭治郎の身体は、我慢ができるはずなどなかった。

白濁を掻き出した最中に快樂の篝火が灯り、今も激しい勢いで燃え上がっている。意識を反らそうとしても腰がとろとろと蕩けて、到底無視することなどできない。

ふうふうと息を荒げ、引き止めたまま二の句が継げずにいる炭治郎のそばに、富岡が歩み寄り、頬に手を添えて疼熱に浮かされた炭治郎の愛らしい顔を覗き込んできた。

(富岡さん、怒っている匂いがする・・・?)

匂いに敏感な炭治郎は人の感情ですら、匂いで慮ることができない。富岡が自分に向ける感情が、不甲斐ない弟弟子に対する怒りだとしても仕方のないことだが、熱に浮かされた炭治郎にはそれすらも深く考えることなどできず、身体が先走ってしまう。

「んっ・・・む・・・」

炭治郎のほうから富岡の首に腕を回し、稚拙ながら接吻を施す。すぐに拒絶されると思ったが、存外富岡は普通で、炭治郎に唇を啄まれるがままになっている。

敏感になった唇に柔らかい感触が当てられるだけで頭に霞がかかってきそう、吐息を深くした炭治郎に、富岡は炭治郎の首を支えて自ら率先して唇を塞いできた。

「んんっ・・・ん、んん・・・」

鼻にかかった甘い声をあげ、炭治郎が接吻の快楽に頭を白ませる。口の接触だけでここまで愉悦がこみあげ、妖者たちにされても到達しなかったと言うのに、やはり相手が気心の知れた者であることから、安堵の気持ちも重なって、抑えていた官能が解き放たれたのだろうか。

上体を起こして互いに接吻をしばらく続け、炭治郎の身体から力が抜けてゆくと、そのまま押し倒された。富岡が炭治郎の胸をみたいで覆いかぶさり、その上から再び口づけを続ける。それは顔中にも及び、涙に濡れた目端や頬に唇を付けられ、気恥ずかしい思いと共に、情欲がどんどんせり上がってくる。

「はああ・・・っ、富岡さ・・・ん・・・」

「義勇でいい」

そう言って真正面から見つめられ、義勇の美男ぶりに改めて気恥ずかしくなり、炭治郎はさらに首から上に熱を上がらせた。

童子のように頭を撫でられ、顔から無防備な首筋に唇が落ち、舌のような粘質な感触も伝わって、義勇にされているのだということが信じられず、炭治郎は戸惑いながらも愛撫される心地よさに耽溺しそうになっってしまう。

義勇の広く硬い手が胸をまさぐり、桜色にかかった瞬間、脳天が真っ白になる愉悦が走って、炭治郎は思わず義勇の手を振り払いそうになった。

「あっ・・・そこは、だめです・・・」

妖者たちの針に寄って狂わされた性感がまだ治まらず、胸は相変わらず敏感なままだった。しかし義勇から怒りの匂いがさらに強くなり、炭治郎は戸惑い、一度は否定したが、義勇の手を取って自らの胸に導いてゆく。

（感じたらだめだ、義勇さんも男の俺を抱くなんて気分がいいはずがない・・・）

それならば、炭治郎に抵抗する資格などあるだろうか。ここは義勇の好きなように身体を預け、自分は機嫌を損ねないように合わせるだけだ。

義勇の長い指が炭治郎に桜色にかかり、背中が愉悦で細かく震える。その反応を抑えて息を吐くが、その吐息は淫らにそまり、快楽を期待した男を誘う甘さがあった。

炭治郎は苛烈な修行で体中が傷跡だらけだ。特に胸には三本爪で袈裟切りにつけられたあとが痛々しく、初めて見る者は少ししたじろいになってしまうだろう。

思い出したくないのに、妖者たちの声がよみがえってくる。

（これで皮膚の薄い部分は、触れられれば性の欲情を感じるようになったぞ。お前は体中傷跡だらけだ。衣服が擦れただけで情欲が生じて、まともに戦うなどできなくなるだろう）

そんな馬鹿な話があるか。たった一日で自分の身体を変えられてしまうなど、たまったものではない。自分の心を追い詰めるための妖者たちの戯言だろうが、義勇に肌へ触れられるたびに身体の疼熱が高まってゆく。

「んんっ・・・そこ、本当にだめっ・・・！」

桜色を指で執拗に触れられ、炭治郎は上半身を丸めて義勇の指から逃れようとしたが、いつまでも追ってくる。

妖者の針でこんな場所でも性の極みを味わえるようになってしまった若い身体には、戯れに触れる義勇の手指は欲情の篝火の火力を強めるだけだった。

「ふあっ・・・！やっ・・・！」

指で愛撫されていない片方の桜色に唇を付けられ、舌先で先端を転がされる。

涙がこみ上げるほどの愉悦が背中を駆け巡り、突然与えられた妖熱に戸惑いながら、炭治郎は義勇の黒髪に指をうめながら、必死に快樂の時間を耐えた。

しかし硬くした舌で桜色を上下に弾かれ、歯で軽く甘噛みされて強く吸われた瞬間、胸にじわりと抗いがたい快感が広がり、炭治郎は恥も忘れて艶声を上げ、身体を派手にしゃくりあげた。

「あつ！あつ！——つ！あああああつ！」

胸で快楽を極めさせられ、ぶわあ・・・と上半身に広がる達悦に意識を奪われ、我を失って義勇にしがみついていた。快楽が去るのを感じながら、炭治郎は信じられない思いでしばらく呆けてしまった。

あの義勇が自分の身体に触れているだけでも信じがたいというのに、炭治郎の身体を好くしようと愛撫を施している事実には、頑固な炭治郎の頭が付いて行かない。義勇に快楽の恥をさらしているという意識も薄れ、長く硬い指に身体を触れられるがまま、炭治郎は愉悅の反応を健気に返すだけだった。

「んっ・・・んん・・・」

背中や胸、下腹やわき腹を撫で回され、性感帯になった無数の傷跡が触れられるたびに熱を帯びる。

炭治郎が感に堪えた様に、はあ、と息を吐くと、額や顔に口づけ、耳に舌を這わされ泣き出しそうな感情がこみ上がってくる。

妖者たちにくるまがり責められている時も幾度となく涙を流したが、今流れ書けている涙は、折檻から解放された安心感と、暖かい人肌感覚が感じられて自然と零れそうになる物で、炭治郎は戸惑いながらも嗚咽をこらえるのに精いっぱいだった。

続きは本編でお楽しみください